

保たれたものとふしぎに思われます。

苦しい事にも、行商にも慣れるにしたがつて、顔なじみができて、品物も売れるようになり、時には昔の教え子達の暖かい気持に触れて涙ぐむこともたびたびでした。

こうした中から、最後の一人が帰る迄と、自分にも子供にも言い聞かせて、引揚促進運動に全身全力をあげて精進いたしました。主人はとうとう消息不明、生死不明のまま公報処理されました。そのことは悲しいことですが、長い運動の中で、自分で納得が出来ました。

私の心残りには、一番苦勞を共にしてくれました長男が数年前に妻子を残してガンのため早逝したことです。私もはや八十歳をこえましたが、往時の辛苦を思いおこしながら、一日一日を大切に送っております。

満州チチハル地域からの記録

岩手県 小野寺 正夫

昭和二十年八月八日、ソ連は日本に宣戦布告、八月九日チチハル上空にソ連機が二度にわたり飛来、チチハルの日本軍飛行場に爆弾を投下爆破炎上。十日チチハル鉄道局前にソ連機二機飛来爆弾投下五十トン、満州里では午前零時すぎに突然対岸のマチェフスカヤから集中砲撃をうけ、国境警備隊員二十人、参事官金尾猛ほか約百人が戦死し、婦女約五十人は自決した。十一日第一報、満州里駅長より電話で報告、ソ連軍満州里に進駐と。その後ハイラル―牙克石―博克図―札蘭屯―昂昂溪を経て八月十七日、チチハルに進駐。

八月二十一日、ソ連軍により日本人鉄道局工場建設事務所、各現場機関、約五千九十七人が各職場を追放された。反満抗日分子が釈放され「治安維持会」成立。ソ連軍人の物取り・暴行盛んに行われる。日本人将校、

憲兵、警察官の搜索、日本人民衆裁判がさかんに行われる。日本軍の軍需物資、工場施設機械類の撤去、ソビエト本国、移送。日本人使役者毎日二百人を越える。

十一月一日、日本人会結成され会長に元チチハル鉄道局長江崎重吉氏就任。(私は難民救済に専念) 新聞、ラジオ、電気、水道は停止された状態にあつて、在チチハル日本人は越冬準備を始める。各地旧満鉄社宅約十五か所に井戸を掘る。

孤児が続出す。孤児院を設け、院長としてその任にあたる。孤児四十八人、後四人、五十二人と共に「昭和二十一年八月二十三日日本引揚げまで孤児とともに苦楽を共にした。

十二月十二日、ソ連軍のバックアップで中共軍進入、市街戦となり、市内に日本人の死体が散乱。開拓民約千二百人に対し、食糧はコウリヤン一人一日六百グラム、乾燥味噌、乾燥野菜、その他の配給、栄養失調にかかる。

昭和二十一年一月十日頃より零下三十五度となり、難民約千三百人病氣その他で倒れる。倉庫の中は土間

にアンペラを敷き、その上に敷布団と毛布三枚という寒さと共に、死亡毎日百人程。死人をそのまま中国人の馬車に横に積み上げて、嫩江の川辺に捨てた。死体は凍り、カラカラと引きずられていく。北滿は毎日マインス三十度、ときには四十度という寒冷の中の生活。二十一年三月三十日、江崎重吉日本人会長が五人の者と帰宅の途中、目の前で暗殺されるという事件が起こる。

八月二十八日、突然引揚命令で午前十一時五十分頃、孤児五十二人、保母四人、看護婦一人、私も家族六人、六十三人、その他一般日本人約二百人の者が、車四両編成チチハル駅出発、やっとハルピンの駅到着、ところが第二松花江の鉄橋が爆破され、列車は通れない。松花江まで歩くことになり、幼い子供たちは、中国人をお金を出して雇い、松花江まで運び、やっと炎天の中で到着することができた。ところが問題が起った。こちら側は共産軍、向こう側は国府軍地。川を渡るのに条件があり、その一つは、日本女性何人かを慰安婦として渡すこと、二つは渡河料金を出すこと。

野宿することになり、夕食はパンと魚、肉をいぶしてかわかした物を食べた。水はやつと中国人の部落からもらった。その晩はよく眠れず、孤児たちの世話をした。朝九時過ぎ、やつと共産軍の渡し船で向こう岸にたどりつく。炎天の中で、私は倒れそうになった。船から降りて、約二キロの原野を列車の線路まで歩きつづけた。駅もない原野の鉄道線路には無蓋貨車がおいてあり、五両ぐらいであったのではないかと思う。孤児一人一人を手で貨車に乗せた。転落しないように大人は外側にすわり、気をつけて見まもった。その晩大雨が降り、体全体が「濡れそぼつ」風邪を引く者も出る。やつと二十四時間かかって奉天駅に到着、下車、難民収容所に二泊、ここでは日に三度高粱食であり、孤児の中には下痢が発生して、手当てに苦勞。

九月一日、いよいよ奉天発十時三十分錦州に向かった。午後四時錦州に到着。全員無事を喜びあった。旧日本軍軍馬の小屋でとまった。コンクリート、馬糞の臭が鼻につき、寝れなかった。翌二日錦州出発、コロ島に到着したのは夕刻。旧海軍の兵舎、屋根もなく床

もない、アンペラを敷き、孤児と共に夜は月がこうこうと明るくかがやきわたって見えた。ここで毎日何となく約十日間が過ぎた。九月十八日、いよいよ内地に帰ることが伝えられた。一行六十三人は、コロ島の岸壁で一人一人の持ち物を検査され、異常のない者から次々とDDTを頭から背中から散布された。

幼な子を抱えて苦難の逃避行

福島県 鈴木末子

私は形ばかりの結婚式をあげ、夫正雄と一緒に昭和十八年二月渡満し、三江省佳木斯市の東満社宅に落ちついた。昭和十九年四月十八日長男を無事出産した。親子三人の安穩な生活も一年足らずで、あの苦しみが、はじまった。

佳木斯はソ満国境に近く、昭和二十年八月九日ソ連軍の侵攻が始まり、避難命令が出てなんの準備も出せず、ただオロオロするばかりだった。